



Vol.133

## CONTENTS

- 【コラム】オンライン試験と公正性…鈴木 大助  
 【解説】マルチプラットフォーム時代の情報教育—シンポジウム「これからの大学の情報教育」2021 開催報告—…喜多 一  
 【解説】オープンバッジと学びの未来…堀 真寿美

基  
般



## COLUMN

### オンライン試験と公正性



コロナ禍を契機として大学では広くオンライン授業が導入され、それに伴う学習評価の方法も注目された。教室で厳正な監督下で行う試験と比較すると、各自の部屋等で受験するオンライン試験の方が不正は容易に思われる。このため、それまで試験で評価していた科目でも、レポートによる評価に変更する例が全国で見られた。一方、遠隔でも公正な試験を実施するべく、Web カメラによるモニタリングを含むさまざまな方法も提案・実施された。

筆者は、自室にいる受講生の挙動を逐一モニタリングすることは避けたいと考えた。プライベートな空間に立ち入りたくないし、インターネット検索や他者との相談をモニタリングで防止しようとしても、いくらでも抜け道があるように思われた。むしろ、検索や相談をしたとしても、各自が自力で実践して解決する必要がある問題、受講生によって正答が異なる問題であれば、個々の能力を適正に評価することができるのではないかと。また、そのようにすれば、モニタリングは本人確認程度で済むのではないかと。

筆者の担当科目のオンライン試験では、各自が受験に利用している PC 固有の情報について調査報告を求め、受講生ごとに異なるその固有の情報をういたシミュレーション実習問題を課した。Web カメラは本人確認のためにのみ利用した。結果はそれぞれの日頃の課題の完成度を反映しており、個々の能力を適正に評価する試験が実現できたようであった<sup>☆1</sup>。

また、誤文修正・減点方式の正誤判定問題を学習管理システムで実施した。短い文章を提示し、その真偽の判定を求め、判定が正しい場合は加点、誤りの場合は減点する。「解答しない」選択肢も設け、それが選択された設問は無得点とする。理解の確かさに応じて得点になる仕組みである。さらに、偽と判定した文については、真になるよう修正を求めることで、答案に個人差が生じるようにした。結果、個々の理解度を反映する試験が実現できたようである<sup>☆2</sup>。

個人の理解度や修得した能力を適正に評価するオンライン試験の方法について考えてきた。大学は単位の認定や学位の授与をもって、学生にその能力が備わっていることを保証する。だからこそ、公正な試験や公正な評価を行うよう努めている。しかし、それだけでは十分ではない。学生が不正を行うような人物でないこと、学問的誠実性を備えていることを保証する教育と評価が必要である。簡単なことではないが、地道に取り組んでいきたい。

☆1 鈴木大助：オンライン CBT 試験における不正行為防止策の検討と実践，インターネットと運用技術シンポジウム論文集（IOTS2020），Vol.2020，pp.79-84（2020）。  
 ☆2 鈴木大助：減点方式の正誤判定問題を利用したオンライン CBT 試験の実践と妥当性の検証，情報処理学会研究報告コンピュータと教育，Vol.164，No.12，pp.1-4（2022）。



鈴木大助（北陸大学）（正会員） d-suzuki@hokuriku-u.ac.jp

北陸大学経済経営学部教務委員長教授。2004年京都大学大学院情報学研究科博士課程修了。博士（情報学）。東京理科大学工学部助手、東京工科大学コンピュータサイエンス学部助教、北陸大学情報センター講師等を経て現職。